茶道と日本の道徳教育

ジュディス・ジョンソン

概要

日本のお茶の歴史は長いものです。お茶の初期の儀礼は、6世紀に仏教徒の瞑想の一部として日本に伝わりました。茶道は発展するにつれて、精神面などよりもむしろ中国から取り入れられた道具などに重点が置かれてしまい、だんだん派手なものになりました。この流れとは逆に、10世紀には美的で道徳的な新しい茶道が現れました。今日の一流の茶道家の根源は、大家，千利休(1522~1591年)までさかのぼります。利休の教えは、新しい様式の建築や造園、繊細で適合された芸術の発展を導き、そして茶道を集大成の域まで導きました。

「美」は茶道の基本要素であり、個人や社会の発展に必要な人間の能力です。それぞれ個々に「美」を認識し、価値を評価し、創造する力があります。「精神性」もまた茶道の基本要素なのです。茶道は常に宗教と結び付けられてきました。茶会と禅の精神は同一であり、茶道の極致です。'禅'という文字の意味のひとつに'熟考'があります。茶道は、美の世界である'禅'を熟練する手段でもあります。

茶道は無比の時間であり、「美」や「簡素な生き方」を諭してくれます。それはものの動きで美を追求することです。「美」が伴う生き方、それが真の茶道なのです。

工芸品と模様には奥深い関係があります。不規則な模様は、潜在的に「美」を含んでいます。模様は工芸品そのものの印象、情緒、趣きなどの美の真髄となります。模様には工芸品を作った職人の気持ち、そしてその気持ちを私たちに伝える価値があるのです。不規則性やありのままの不完全さに、「美」が感じられるものです。このことを社会に繋げて考えると、模様と不規則性の概念は、多様性の中での「和合」や「美」となります。(Yanagi、 p.114)

文部科学省は、道徳教育に対してより重要性を置くようになりました。

・・・(省略) 道徳的発展を促す教育は、道徳教育のための時間だけでなく、各々の教科や課外活動の時間にも、彼らの個々の特徴に合わせて施されるべきである。(学習指導要領、小学校、1981年、 p.1)

日本の道徳教育の6つの目的

- 人間の尊厳と生命の畏怖に対する敬意の精神を育てます
- 伝統的な文化を受け継いで発展させようと努力する人々、そして個性豊かな文化を作り出す人々を育成します
- 民主主義社会と民主国を結成し、発展させようと努力する人を育成します
- 平和な国際社会の実現に貢献することができる人々を育成します
- 自主的に決断することができる人々を養育します
- 道徳心を育てます (学習指導要領、小学校、1981年、p.105)

道徳的行為は、精神の美しさの表現です。茶道の「美」や「理念」は道徳的教育や社会的発展を受け入れます。「美」は本質的に価値観の本質です。もしも価値観が混乱していたならば、もしも価値観が標準でないならば、もしも価値のないものが価値のあるものと認められていたならば、私たちは美的、道徳的判断基準を失ってしまいます。

道徳的行為や社会的幸福の基本となる茶道の伝統的な理念

調和と平和（和）
崇敬 / 尊敬（敬）
純粋 （清）
静穏 / 静止 / 平静 （寂）

「美」と「道徳」の表れは、厳粛さ、温かさ、純粋さ、そして平和な心の表れです。茶道はこれらの行為を身に付けるための自己鍛錬を成す一つの手段です。道徳的な教育への非宗派的、しかし、精神的な取組みを提案しているバハーイ教徒国際団体の発言に‘人類の団結は、私たち自身の文化遺産の研究と、全人類を特徴づける普遍的な資質の探検とのバランスを導く’とあります。

現在の一流の茶道大家である鵬雲斎の考えは上記の考えに一致しています。彼の夢はできるだけ多くの人々に教えられるであろうし、安らぎはおそらく一杯のお茶から生まれるでしょう。

参考文献

MEXT. (1989). *The Course of Study, Elementary School.* Tokyo: Japan Ministry of Education, Culture, Sports Science and Technology.

Yanagi S. (1989). *The Unknown Craftsman, a Japanese Insight into Beauty*, Adapted by Bernard Leach. Tokyo: Kodansha International.

日本文化の精神性

角井宏

1. 日本神道の本質（万神霊信仰）

日本神道の核心的理念は、全国各地の多くの神社の祭神として祭られている「素佐之男命」が日本神話の中で発した言葉「清く明るき誠の心」に象徴されていると思う。つまり、何事も包まず隠さず、誠意をもって万神霊に対するという、信仰である。原始的には無社無宰で、やしろ以前に神のよりしろがあり、祭主は大王（天照大神や神功皇后のようなシャーマンに降霊・彼岸と交信すると信じられていた。

参考　天地の初めて開けしとき、高天ケ原に成りませる神の名は、天之御中主神、
次に高御産巣日神、次に神産巣日神。並独り神成りまして身を隠したまいき。
次に国稚く浮かべる脂のごとくにして、クラゲなす漂える時に葦牙の如萌え騰がる物によりて成りませる神の名は、宇麻志阿斯詞備比古遲神。次に天之国営立神（独身隠身・古事記）

2. 夢幻能

１４世紀中葉大和猿楽に観阿弥・世阿弥という天才が現れ、猿楽の物真似を創作劇化して面目を一新した。観阿弥は、曲舞を取り入れ、クセという小段を作り、「卒塔婆小町」、「通小町」のような作品を残した。

世阿弥も「花筐」、「山姥」、「班女」、「砧」、「融」、「高砂」、「忠度」、「清経」、「井筒」のような名曲を残した。「井筒」は、在原廃寺で、旅僧が月夜に業平と紀有常女の深い恋物語を聞くという筋だが、そのかたり手は有常女の霊であり、夢幻に終る夜明けの情感を彷彿とさせる代表的な夢幻能である。